

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 中古和文の「詠嘆・強意」の終助詞と助動詞の承接

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2024-10-28 キーワード (Ja): 終助詞, 助動詞, 詠嘆・強意, 承接, 中古和文 キーワード (En): 作成者: 富岡, 宏太 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/0002000970">https://doi.org/10.57529/0002000970</a>

# 中古和文の「詠嘆・強意」の終助詞と助動詞の承接

富岡 宏太

キーワード：終助詞、助動詞、詠嘆・強意、承接、中古和文

## 1. 本稿の目的

中古和文資料には、いわゆる「詠嘆・強意」の終助詞が多く見られる。「かな」「よ」「や」「かし」などがそれである。(1)～(4)にそれぞれの例を挙げる。

(1) 「いみじく名残なくも見つるかな」 〈枕草子、47段、108頁〉

(2) 《月も隔たりぬるよ》 〈源氏物語、総角、⑤314頁〉

(3) 「容貌さへあらまほしかりきや」 〈源氏物語、竹河、⑤106頁〉

(4) 「さいなまるる人多からむかし」 〈落窪物語、卷二、166頁〉

これらはいずれも助動詞が前接しているが、終助詞がどの助動詞と承接するかについての研究には、後述のように議論の余地が残されている。そこで、本稿では4つの終助詞を接続する活用形から2つに分け、助動詞の分布、及び、その意味するところを明らかにする。本文の引用に際し、表記は私に改めた。引用文中の《 》は心内文であることを、( )は補足説明を示すため、筆者が付した。また、必要に応じて〔 〕に話し手と聞き手も示す。引用部末の〈 〉内は、出典、巻名(数)、使用テキストの頁数である。

## 2. 調査の前提

### 2.1 先行研究

終助詞と助動詞の承接について、個別の終助詞の記述はいくらかある。此島正年(1973)では、「かし」に「む」や「めり」が前接しやすいことが、

森野崇（1990、1992）では、「な」「かし」に推量・推定の助動詞が前接しやすいことが述べられている。一方、体系的な研究で重要なのは高山善行（2002）である。高山は、終助詞を連体形接続のⅠ類（「ぞ」「か」「かな」）と終止形接続のⅡ類（「よ」「や」「かし」「な」）とに分け、中古語のモダリティ形式との承接を調査し、[表1]のようにまとめる。

この高山の調査は、 [表1]：高山善行（2002：32）の表5

モダリティ形式と終助詞の承接を体系的に把握しようとした重要なものであるが、さらに発展させることが可能である。まず、助動詞の側から見ると、対象はモダリティ形式のみで、それ以外の助動詞は調査されていない。また、終助詞の側から見ると、中古和文において連体形接続を基本

	Ⅰ類			Ⅱ類			
	ゾ	カ	カナ	ヨ	ヤ	カシ	ナ
ベシ	○	○	○	△	○	○	×
マジ	△	△	×	×	△	×	×
メリ	×	×	○	×	△	○	○
終止ナリ	×	×	○	×	×	×	○
ム	×	×	×	○	○	○	△
ラム	×	×	×	△	○	○	△
ケム	×	×	×	○	○	○	×
マシ	×	×	×	△	○	○	×
ジ	×	×	×	△	○	○	○

とする「よ」がⅡ類に分類されていたり<sup>(注1)</sup>、「や」において、疑問を表す係助詞文末用法と詠嘆の終助詞とが一括りにされてしまっていたりする。さらに、この7つの終助詞を同次元で扱ってよいかにも疑問が残る。

そこで、本稿では、前接する活用形によって区分する方法は参考にしつつ、その区分をより厳密にし、対象となる終助詞も、比べて検討することがより適切なものに限って、調査・考察する。そのうえで、終助詞を接続の面から分けることで何が見えるのかについても考えたい。

## 2.2 調査資料と対象

調査資料には、中古和文の11作品（竹取物語、伊勢物語、土左日記、大和

物語、平中物語、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語)を使用した。調査対象は、いわゆる「詠嘆」「強意」の終助詞「かな」「よ」「や」「かし」である。これらの終助詞は、単に意味面で類似のラベルが付されているだけでなく、統語面では相互承接した例がない、相補分布の関係にあるものである。また、係助詞や接続助詞など、他の助詞との区別が可能であるという特徴がある(注2)。これらについて、国立国語研究所の『日本語歴史コーパス』を「中納言」によって検索したのち、本文にあたる方法をとった(注3)。コーパスの検索結果から次の4パターンに該当する例を除外した。まず、韻文と散文の傾向差を考慮し(注4)、韻文の例は除外した。次に、疑問の係助詞「や」の例は除く。係り結び文の例や命令形後接の例、意志の助動詞に後接する例も、助動詞の出現傾向が異なるため、除外した。さらに、終助詞単独の場合と他の助詞が承接する場合とで、用法が異なる場合があるので(富岡宏太(2018))、これも目視で除外した。以上の処理を経た例をもとに検討を進める。

以降では、連体形接続の「かな」と「よ」をA類、終止形接続の「や」「かし」をB類と呼ぶことにする。

### 2.3 調査結果と分析の観点

まず、各終助詞をA類とB類に分けたうえでの、前接助動詞の全体像を次頁の[表2]に示す。表中の数値は例数、( )内の数値は、各終助詞の助動詞前接例全体に対する、各助動詞の割合である。たとえば、表の左上、「る・らる」が「かな」に前接した例は2例あり、それが、「かな」に助動詞が前接した223例の中で、0.9%ということである。なお、各終助詞の総数が異なるため、以降では、割合に注目して比較する(注5)。

[表2]を見ると、個別の終助詞が特徴的な分布を示すものがある。たとえば、「断定なり」は「や」に前接した割合が大きく、「まし」は「よ」に前接する例しかない。しかし、これらに体系的な理由があるのかどうかは不明である。そこで、

- ① A類とB類の間で助動詞の分布に差はあるか

②A類とB類、それぞれの内部で助動詞の分布に特徴はあるか  
という2点を先に見ていくことにする。

[表2] 各終助詞の前接助動詞

	連体形接続 (A類)		終止形接続 (B類)	
	かな	よ	や	かし
る・らる	2(0.9)	1(1.1)		3(0.7)
す・さす			1(1.0)	
ず	6(2.7)	7(8.8)	19(18.1)	36(8.8)
つ	23(10.3)	1(1.3)	2(1.9)	4(1.0)
ぬ	14(6.3)	4(5.0)		5(1.2)
たり・り	25(11.2)	6(7.5)	7(6.7)	7(1.7)
けり	84(37.7)	25(31.3)	15(14.3)	5(1.2)
き	27(12.1)	10(12.5)	3(2.9)	21(5.1)
断定なり		1(1.3)	54(51.4)	31(7.6)
まほし				
べし	26(11.7)	1(1.3)		4(1.0)
めり	6(2.7)	1(1.3)	4(3.8)	52(12.7)
推伝なり	10(4.5)			1(0.2)
む		8(10.0)		118(28.9)
らむ		6(7.5)		50(12.3)
けむ		5(6.3)		27(6.6)
じ		1(1.3)		44(10.8)
まし		3(3.8)		
	223	80	105	408

### 3. 分析

#### 3.1 A類・B類の別と助動詞の分布

まず、①「A類とB類の間で助動詞の分布に差はあるか」という問題である。[表2]を見ると、用例の有無というレベルでは、A類とB類の間に体

系的な違いは見出だしがたい。また、出現割合でも、A類全体とB類全体で比較すると、ほとんどの助動詞で意味のありそうな差は見られない。その中で、注目されるのが、過去の助動詞「けり」「き」である。「けり」においては、A類が30～40%程度なのに対して、B類はいずれも15%未満である。(5)(6)に、「けり」がA類の終助詞に前接した例を挙げる。

(5)《あやしうもの思ふべき身にもありけるかな》

〈源氏物語、明石、②263頁〉

(6)《かの妻戸の開きたりけるよ》

〈源氏物語、野分、③266頁〉

(5)は「かな」に、(6)は「よ」に「けり」が前接した例で、こうした例は多い。

次に、B類の終助詞に「けり」が前接した例を(7)(8)に挙げる。

(7)「いとたけかりつる輪、折れにけりや」〈落窪物語、巻二、173頁〉

(8)《昔、藤の宴したまひし、このころのことなりけりかし》

〈源氏物語、若菜上、④83頁〉

(7)は「や」に、(8)は「かし」に前接した例である。このような、B類の終助詞に「けり」が前接した例は、A類と比べると少ない。

また、「き」の前接例の割合は、A類ではいずれも10%を超えるが、B類はいずれも約5%以下である。A類の終助詞に「き」が前接した例を(9)(10)に挙げる。

(9)宮の中將などのさもくちをしかりしかな。〈枕草子、43段、101頁〉

(10)「思し疑ひたりしよ」

〈源氏物語、真木柱、③353頁〉

(9)は「かな」に、(10)は「よ」に「き」が前接した例で、一定割合、見られる。次に、B類の終助詞に「き」が前接した例を(11)(12)に挙げる。

(11)「いさや、ことなることもなかりきや。……」

〈源氏物語、帚木、①82頁〉

(12)「(明石君ノ)人柄のをかしかりしも、所からにや、めづらしうお  
ほえきかし」

〈源氏物語、滯標、②292頁〉

(11)は「や」に、(12)は「かし」に「き」が前接した例である。こうしたB類の終助詞に「き」が前接した例は、わずかである。

以上のように、A類・B類間の分布を問題にすると、前者の方が、過去の助動詞の出現率が高いことがわかる。なお、こうした分布特徴が見られる理由は、②を検討することによって明らかになるので、後述する。

## 3.2 A類とB類の内部における分布特徴

### 3.2.1 分布の実態

次に、②の「A類とB類、それぞれの内部での分布の特徴」を調査する。ここで注目するものは、A類とB類で異なる。A類では、「む」「らむ」「けむ」「じ」という推量の助動詞と「べし」「めり」「推定伝聞なり」という推定<sup>(注6)</sup>の助動詞（以下、単に「推量」「推定」と呼ぶことがある）との関係に、B類では、推量・推定の助動詞と断定の助動詞「なり」との関係に注目する。その理由を、実態とともに以下に示す。

まず、A類である。[表2]を改めて見直すと、推量は、「よ」で計20例(25%)であるが、「かな」には例がない。一方の推定は、「かな」では計42例(18.8%)あるが、「よ」では計2例(2.5%)しかない。(13)は「よ」に推量が前接した例、(14)は「かな」に推定が前接した例、(15)は「よ」に推定が前接した例である。

(13) 「……おはしまさざらむよ」 〈落窪物語、巻一、60頁〉

(14) 《御年のほどよりはをかしうもおはすべきかな》

〈源氏物語、賢木、②92頁〉

(15) 《(沢山ノ手紙ヲ)見ずなりぬべきよ》 〈源氏物語、幻、④547頁〉

(13) のような例は見られても、「む+かな」のような「推量+かな」の例はない。また、(14) のような例は多く見られるが、(15) のような例は僅少である。

このような、互いに補い合うような関係はB類の終助詞には見られない。推定も推量も、「や」の方が「かし」よりも出現の割合が小さいのである。(16)は「や」に推定が前接した例、(17)(18)は「かし」に推量、推定がそれぞれ前接した例である。

(16) 「……夜も更けぬめりや」 〈源氏物語、真木柱、③363頁〉

(17) 「もの隠しは懲りぬらむかし」 〈源氏物語、紅葉賀、①346頁〉

(18) 「昨夜おはしましけるなめりかし、……」 〈和泉式部日記、26頁〉

(16) は推定の「めり」が「や」に前接した例であるが、こうした例は計4例(3.8%)しかなく、推量が「や」に前接した例はない。一方、(17)の「む」、(18)の「めり」のように、推量・推定が「かし」に前接した例は、それぞれ、239例(58.6%)、57例(14.0%)となっており、「かし」の中での推量と推定の差こそあれ<sup>(注7)</sup>、いずれも「や」より「かし」の方が多い。

以上について、[表2]をもとにまとめなおしたものが、[表3]である。

[表3] 各終助詞に前接する推量・推定の分布

	連体形接続 (A類)		終止形接続 (B類)	
	かな	よ	や	かし
推量		20(25.0)		239(58.6)
推定	42(18.8)	2(2.5)	4(3.8)	57(14.0)

ここからも、推量は「よ」と、推定は「かな」と相性が良いのが明らかである。

しかし、この観点ではB類の特徴が見出せない。これを明らかにするためには、他の観点が必要である。そこで、[表2]に戻り、「や」に多く「かし」に少ないものを探すと、「断定なり」が注目される。「断定なり」は「や」で50%を超えるのに対し、「かし」では10%に満たない。(19)は「や」に、(20)は「かし」に「断定なり」が前接した例である。

(19) 「かなしうしたまふ」とは世の常なりや。〈落窪物語、巻四、341頁〉

(20) いとさかしらなる御親心なりかし。 〈源氏物語、胡蝶、③187頁〉

この特徴は、A類には見られない。「断定なり」の前接例は、「かな」にはなく、「よ」にも1例(1.3%)のみである。推量・推定の助動詞をひとまとめにし、「断定なり」と対置させたのが、次の[表4]である。

[表4] 各終助詞に前接する断定と推量・推定の分布

	連体形接続 (A類)		終止形接続 (B類)	
	かな	よ	や	かし
断定		1(1.3)	54(51.4)	31(7.6)
推量・推定	42(18.9)	22(27.5)	4(3.8)	296(72.5)

[表4] からも、「断定なり」は「や」と、推量・推定は「かし」と相性が良いことがわかる。

### 3.2.2 分布の解釈

#### 3.2.2.1 A類の終助詞の分布

ここからは、A類・B類内部で分布に特徴が見られる理由を考える。まず、推量と推定とにおける、「よ」「かな」の割合の非対称性についてである。これは、ともに詠嘆の終助詞とも呼ばれる「よ」と「かな」の用法上の差に基づくものと考えられる。詠嘆には、詠嘆の対象となる事態と、そこから引き起こされる情意や評価の両方が必要である。近藤要司（2019：439-440）は、前者を「感動の中核」、後者を「感動の内容」と呼び、体言に後接する場合の両助詞の用法を対照している。その結果として、「よ」は、「感動の中核」（＝対象事態）に言及し、「感動の内容」（＝「事態に対する話し手の情意・評価」）は文脈に委ねる際に使用されること、「かな」は「感動の中核」と「感動の内容」の両方に言及する際に使用されることを述べている。この考え方は、活用語に両助詞が後接する場合にも、おおむね当てはまる。そこで、「よ」と「かな」の用法から、推量・推定の分布について考える。

本稿で推量に区分した「む」「らむ」「けむ」が「よ」に前接する例には、推量とは解釈しがたい(21)～(23)のような例がある(注8)。

(21) [源氏]《いで、あな、心憂や、かく人づてならず憂きことを知る  
知る、(私ガ女三宮ヲ) ありしながら見たてまつらむよ》

〈源氏物語、若菜下、④254頁〉

(22) [浮舟]《かの人(＝匂宮)の、のどかなるべき所思ひまうけたりと、

昨日ものたまへりしを、かかることも知らで、(薰ハ) さ思すらむ  
よ》  
〈源氏物語、浮舟、⑥144頁〉

(23)〔紫上〕《我はまたなくこそ悲しと思ひ嘆きしか、すさびにても(源  
氏ハ他ノ女性ニ) 心を分けたまひけむよ》

〈源氏物語、滯標、②292頁〉

(21) は、柏木と女三宮の密通を知った源氏が、「今までどおり女三宮の世話をすること」について述べている。一人称主語ではあるが、直前に「心憂や」とあるように、積極的に「世話をしよう」という意志の例ではないし、自分でどうにかできることなので、推量とも考えがたい。(22) は「らむ」の例で、浮舟が薫から、「あなたを迎える邸宅を用意している」と聞かされた直後の心内である。浮舟は匂宮という別の男性にも誘われており、「そのことも知らずに薫がそう(=浮舟に来てほしいと) 思っていること」に言及している。薫の考えは直前の発話で明らかなので、ここで重要なのは、推量することではなく、「薫がそう思っていること」という事態である。(23) は「けむ」の例である。直前の発話で、源氏は、都から離れていた際、他の女性に心を寄せていたことを告白している。それを承けた心内文である。よって、推量の必要はない。重要なのは、「源氏が他の女性に心を寄せていたこと」という事態である。これらの例から考えるに、「よ」に前接する「む」「らむ」「けむ」において大事なものは、様々な時間上の、話し手が把握していない事態について述べることだと考えられる。もちろん、推量で解釈できる例も多いが、それは文脈から導かれるものであろう。なお、「じ」が「よ」に前接する唯一の例は、打消推量でも解釈可能であるが、「む」の否定形式という点を考えれば、同等に扱ってよいものと思われる。このように捉えることで、事態のみに言及する際に使用される「よ」と、推量の助動詞群の相性の良さが説明される。

これを踏まえて〔表2〕を見直すと、「よ」には、過去や完了の助動詞のほか、4つの終助詞の中で唯一、「まし」が前接し、反事実の領域にも言及する。つまり、最も広い領域の事態に言及できるのである。この点からも、「よ」が事態に言及する際の終助詞であることが確かめられる。

これに対して、推定の助動詞は、事態よりも、その事態を根拠とした話し手の認識に焦点が当たるため、「よ」とは相性が良くないのであろう。

次に、「かな」に推定の助動詞の前接例が多い理由を考える。前述のように、「かな」の使用時には、話し手の情意や評価が言語化される。その際、最も多いのは、話し手が何らかの事態に直面していて、それに対する情意や評価を表す場合であろう。

(24) [源氏→玉鬘]「いとさばかりには見たてまつらぬ御心ばへを。いとこよなくも憎みたまふべかめるかな」

〈源氏物語、胡蝶、③189頁〉

(25) [源氏→若紫]「げに、いと心なき人のしわざにもはべるなるかな。……」

〈源氏物語、紅葉賀、①321頁〉

(26) [源氏→玉鬘]「……。このごろ幼き人の、女房などに時々読まするを立ち聞けば、ものよく言ふ者の世にあるべきかな。……」

〈源氏物語、③211頁〉

(24) は玉鬘の様子、(25) は直前の若紫の発話、(26) は自分が立ち聞きした情報をもとに推定している。いずれも、話し手が直面した事態に基づく推定のため、「こよなし」という話し手から見た程度や、「心なし」「よし」といった評価を表しやすいのである。

さらに、「べし」の前接例では、次の (27) (28) のような例も注目される。

(27) [源氏]《……、ゆゑは飽くまでつきたまへるものを、もし世の中に飽きはてて下りたまひなば、さうざうしくもあるべきかな》

〈源氏物語、葵、②53頁〉

(28) [惟光]「懸想人のいともものげなき足もとを見つけられてはべらん時、からくもあるべきかな」

〈源氏物語、夕顔、①152頁〉

(27) は「下りたまひなば」という仮定条件節が、(28) は「助動詞む＋名詞(時)」の形で仮定を表す従属節が共起している。こうした例では、主節でも想像上の事態に言及することになるが、「かな」に前接するのは「べし」のみで「む」の例はない。その理由を考えるにあたり、重要なのは、「べし」の前接句がすべて「形容詞＋も＋補助動詞」であるということである。つま

り、情意や評価のみを言語化する例しかないのである。想像上の事態に情意・評価を示せるのは、話し手が根拠を持っているからである。たとえば、(27)で「六条御息所が伊勢に下ったら寂しい」という情意を表明できるのは、源氏が六条御息所の良さを知っているからである。(28)も、「好意を抱く相手の前でみすぼらしい格好をすべきでない」という一般論を根拠に、「見つかったら辛い」と述べている。反対に、想像上の事態に対し、何の根拠もなく情意・評価を表明するのは考えにくいから、推量の助動詞は「かな」に前接しないのだと考えられる。

以上のように、「よ」「かな」における推量と推定の分布の差は、両助詞の用法と助動詞の用法との相性に基づくものと考えられるのである。

### 3.2.2.2 B類の終助詞における分布

次に、B類の終助詞において、断定と推量・推定とが対立する点についてである。「断定なり」の使用は、文字通り、断定的な発話態度を表すことになる。それに対して、推量や推定の助動詞を使用することは、結果として、「断定なり」の使用よりも不確実さを残した発話態度をとることになる。

ここで、B類の終助詞の意味を確認し、助動詞が結果として表す発話態度との相性を考えてみる。まず、「や」の意味は、「臨場的な感情表出」(富岡宏太(2021))である。急激な感情の発露であるから、断定と相性が良く、不確実さを残す推量・推定とは相性がよくない。次に、「かし」の意味は、「弱め」(柴田敏(1993))や「擬似的不定化」(富岡宏太(2017))とされる。要するに、たとえ話し手にとっては確実な見解であっても、そうではない可能性を認めるかのような発話態度をとるということである。これは、断定的な物言いとはあまり相性が良くないため、割合は小さくなる。裏を返せば、不確実さを残す推量・推定の助動詞との相性はよいということである。

このように、助動詞の分布は、A類では終助詞の用法と助動詞の用法との相性で、B類では助動詞が結果的に表す発話態度と終助詞の意味との相性で、決まるのである。

#### 4. A類とB類とに分ける意義

以上で検討してきたことは、次のようにも言い換えられる。すなわち、A類の終助詞は、「事態か話し手の情意・評価か」「事態ならばいつ・どの領域のできごとなのか」など、発話内容による使い分けが重要であり、B類の終助詞においては、「断定的に述べるか否か」という発話態度による使い分けが重要である、ということである。

A類が発話内容を重視する終助詞だと考えると、過去の助動詞の割合がA類で大きくなる理由も説明できる。事態のみに言及するにしても、話し手の評価や情意に言及するにしても、言及されやすいのは、既に起こった出来事である。その中でも「けり」は、現在とつながりを持った過去や伝承された過去に言及する場合、何かに気づいた場合など、様々な場面で使用される。そのため、特にA類の割合が大きくなる。また、「き」で言及される過去の事態は、事態として描かれることも評価の対象になることもありうる。そのため、「き」の割合も小さくない。一方、B類はあくまで断定するか否かという発話態度と関わるので、時制の使い分けは、A類ほど重視されない。結果、過去の助動詞の割合が小さくなるのであろう。

以上のように、終助詞を接続する活用形から分類することにより、分類間の分布の特徴も、A類・B類内部における分布の特徴も掴めるのである。

#### 5. 本稿の結論

本稿では、中古和文の「詠嘆・強意」の終助詞を、連体形接続のA類と終止形接続のB類とに分け、次の諸点を明らかにした。

- ① A類とB類の間で分布に差が見られるのは、過去の助動詞である。
- ② A類とB類、それぞれにおける助動詞の分布を調査した。その結果
  - ②-1 A類の終助詞において、「よ」は推量の助動詞、「かな」は推定の助動詞と相性がよい。これは、詠嘆の対象となる事態のみに言及するか話し手の情意・評価にも言及するかという終助詞の用法と、助動詞の用法との相性に起因する。

②-2 B類の終助詞において、「や」は「断定なり」と、「かし」は推量・推定の助動詞と相性がよい。これは、断定的に述べるか否かという各助動詞が結果的に表す発話態度と、終助詞の意味との相性に起因する。

③ ②-2 から、A類の終助詞は発話内容に基づく使い分けが、B類の終助詞は発話態度に基づく使い分けがより重要であると考えられる。

このように考えることで、①の過去の助動詞の分布についても説明できる。

本稿では、前接語の形態的特徴から、終助詞をA類とB類とに分類し、一定の成果を得た。しかし、分類方法は他にも考えられる。異なる観点に立った時に、何が言えるのかについては、今後の課題とする。

## 注

- 1 小田勝（2015）でも、「よ」は連体形接続の終助詞に分類されている。
- 2 詠嘆・強意の終助詞と呼ばれるものには、「か」「ぞ」「な」「を」などもある。しかし、「か」は疑問・反語の例しかないので除外した。また、「ぞ」「な」は他の終助詞と承接するため、「を」は格助詞や接続助詞との区別が困難なため、対象としない。なお、漢文訓読資料には「かなや」という形式があるが、和文資料にはない。
- 3 検索条件は、「キー」を「助動詞」、後方共起条件の「キーから1語」を品詞一助詞、語彙素を「哉」「よ」「や」「かし」とした。
- 4 散文と韻文における終助詞の用法の違いの一端は、富岡宏太（2016）でも述べた。韻文の「かな」は、散文の「かな」と異なり、形容詞・形容動詞によって評価を表す例が極端に少ない。
- 5 この他、例数を比べる方法や、各助動詞にどの終助詞に前接するかを見る方法もあるが、いずれの場合も各終助詞の母数の違いが問題になるので採らなかった。
- 6 ム系助動詞と呼ばれる助動詞群と、「む」の否定形式「じ」を推量とし、いずれも終止形接続で、根拠に基づく推量を表す助動詞群を推定とした。
- 7 「かし」における割合の差の要因は、富岡宏太（2017）で述べた。婉曲の「めり」が「かし」に前接しやすいことが理由として考えられる。
- 8 推量等を表さない「むよ」「らむよ」「けむよ」の存在は、栗田岳（2019：35-37）にも指摘がある。

## 使用テキスト等

竹取物語、伊勢物語、土左日記、大和物語、平中物語、落窪物語、枕草子、源氏物語、和泉式部日記、紫式部日記、堤中納言物語→新編日本古典文学全集（小学館）  
国立国語研究所（2021）『日本語歴史コーパス』（バージョン2021.3、中納言バージョン2.5.2）  
<https://ccd.ninjal.ac.jp/chj/>（2021年5月13日確認）

## 参考文献

- 小田勝（2015）『実例詳解古典文法総覧』和泉書院  
栗田岳（2019）『古代日本語と現実の諸様態』清文堂出版  
此島正年（1973）『国語助詞の研究—助詞史素描—増訂版』桜楓社  
近藤要司（2019）『古代語の疑問表現と感動表現の研究』和泉書院  
柴田敏（1993）「終助詞カシのモダリティ」『小松英雄博士退官記念日本語学論集』三省堂  
高山善行（2002）『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房  
富岡宏太（2016）「三代集の文末助詞カナ」『国語研究』第79号（國學院大學国語研究会）  
富岡宏太（2017）「中古和文の助詞カシ」『日本語の研究』第13巻4号  
富岡宏太（2018）「中古和文の「ぞ+かし」—「ぞ」と「かし」との対照から—」青木博史・小柳智一・吉田永弘編『日本語文法史研究4』ひつじ書房  
富岡宏太（2021）「中古和文の終助詞・間投助詞「や」」『國學院雑誌』第122巻7号  
森野崇（1990）「古代日本語の終助詞「な」について」『秋草学園短期大学紀要』第7号  
森野崇（1992）「終助詞「かし」の機能」『辻村敏樹教授古稀記念日本語史の諸問題』明治書院

【付記】 本稿は JSPS 科研費18K12400の助成を受けている。